

# 取材のお願い

公益財団法人古川知足会 爲三郎記念館



## 古今無双 瀬戸陶芸物語

瀬戸陶芸100年への歩み

2023年9月8日（金）～10月1日（日）

波多野正典「時を紡ぐ」2023年 作家蔵

### 展覧会のご案内



「灰釉締腰形瓶子」 鎌倉時代 瀬戸蔵ミュージアム蔵

各位

平素は格別のご厚情を賜りありがとうございます。

この度、瀬戸陶芸協会との共同主催にて「古今無双―瀬戸陶芸物語―瀬戸陶芸協会100年への歩み」展を爲三郎記念館にて開催する運びとなりました。日本を代表する六古窯の一つである瀬戸は陶器と磁器の異なるやきものが共存する日本唯一の窯元です。この地には多くの作家が古来から作陶を続けてきました。そして瀬戸には日本一の歴史をもつ作家による陶芸協会があります。本展は瀬戸陶芸協会現会員の近作から古い歴史を誇る瀬戸陶芸の今をご紹介します。千差万別の陶芸の魅力をお楽しみいただける内容です。

是非とも貴媒体にてご紹介いただきたく、お願い申し上げます。

## Topic1 なぜ瀬戸は陶芸が盛んか？

### 土壌に恵まれた瀬戸

瀬戸は長きにわたり、やきものに適した陶土・釉薬の原料・薪など豊富な資源に恵まれ、やきものの町として発展してきた。地質学的には、新第三紀鮮新紀(約700万年から300万年前頃)に、淡水湖であった東海湖及び古琵琶湖に堆積してできた蛙目粘土と木節粘土という慮質な粘土が豊富に産出する。この粘土の大きな特徴は鉄分がほとんど含有されていないこと。そのため素地の白い焼き物をつくることができたのである。加えて鉄分や不純物が少ない土は粘りがあって成形しやすく、焼成温度も高いため、瀬戸窯は中国の白磁や青磁をモデルに多種多様な製品の生産が可能になった。こうした優れた陶土を豊富に産出した瀬戸は、他の窯業地にはない製品を作る出すことができたのである



## Topic 2 瀬戸陶芸協会とは

瀬戸で最初の創作者集団と言えるのが、大正3年(1914)に設立された「瀬戸図案研究会」である。この会は、愛知県立陶器学校(現愛知県立瀬戸窯業高等学校)の図案教師であった日野厚が中心となり出来た研究会である。会では、陶磁器図案展覧会の開催、図案集の発刊など当時としては先進的な活動を行っていた。そして、瀬戸図案研究会の設立を契機として、瀬戸において陶芸家集団が次々と誕生していくことになる。大正13年(1924)には、加藤土師萌等によって「陶均会」が、そして昭和4年(1929)には、瀬戸在住の若手陶芸家の集いとして、長江明治等が中心となって「土の風景社」が設立された。



図2:昭和10年頃瀬戸陶芸協会展会場 東京白木屋

この会は、昭和7年(1932)には藤井達吉の教えを受けて「瀬戸作陶会」と名を変えている。また、昭和6年(1931)には、加藤華仙が中心となって「春陶会」が結成されている。この「瀬戸作陶会」と「春陶会」の2つの会が瀬戸の陶芸界をリードしていくことになる。そして、昭和11年(1936)6月20日、顧問に板谷波山・加藤頭清・日野厚を迎え、「瀬戸作陶会」と「春陶会」のメンバーを中心とした「瀬戸陶芸協会」が設立している。これは、藤井達吉が「芸術は産業の母体である」と当時の瀬戸市長泉崎三郎氏に働きかけた結果であった。瀬戸在住の分野が異なる陶芸家が一致団結して結集したことは画期的であった。協会では、日展を中心とする各種公募展への出品、春の陶芸協会展、研究旅行などの活動を行っており、これらの活動をとおりて会員同士が交流するとともに、切磋琢磨していくことで会は発展していった。発足から約80年たった現在でも、春の陶芸協会展、秋の秀作展などの活動が行われており、瀬戸の陶芸界を牽引している。

### Topic3 瀬戸のはじまり 瓶子を復興

千年もの間やきもの作りを連綿と続けてきた瀬戸では、様々な陶工がその時代に合わせ、やきものの発展を願い、試行錯誤を繰り返し、現在の一大名産地となった。その始まりは11世紀（平安中期）。瀬戸陶芸は中国・宋の舶載品の模倣から発展し、鎌倉中期には四耳壺、水注、瓶子が多く作られてきたのである。瓶子は祭祀用のやや大型の酒器だが、武家層や寺院などを中心に鑑賞用としても受容、国産高級陶器の産地としての地位を瀬戸は確立する。本展では鎌倉期の瓶子を展示する。均等でかつ美しいフォルムは見逃せない

(図3)「灰釉締腰形瓶子」鎌倉時代 瀬戸蔵ミュージアム蔵



### Topic4 瓶子を復興 瀬戸陶芸協会現会員による挑戦

本展は瀬戸陶芸協会の今を伝えるのが目的であるが、ただそれぞれの作家が近作を展示するのでは味気ない。そこで本展では瀬戸の陶歴を紐解き、瀬戸の名器、瓶子を現在の作家によって復興させる。鎌倉時代に美しいとされていた瓶子が、約1200年の時がたった今どのように変化しているのか。当時の美しさに現存作家の感性は勝ることができるのか。瀬戸陶芸協会員の挑戦も見ごたえがあることまちがいない・



(図4) 波多野正典「時を紡ぐ」



(図5) 長江重和「そらあい瓶子」



(図6) 竹内真吾「炬器壺」



(図7) 水野教雄「練込瓶子」



(図8) 松吉「古瀬戸瓶子」



(図9) 加藤勝利「緑釉鑄吹刻文瓶子」

### Topic5 瀬戸の多様性

織部や黄瀬戸の制作を基本におきながらも創作性に溢れる作風を展開する作家も瀬戸の特徴といえる。素材のもつ特性を生かした独創的かつ大胆なオブジェは、作家たちの土との対話を物語っているよう。

(図10) 長江重和 葵の間展示一部

ーここがポイント!!ー

一見すると紙のシェードに見えるほど、繊細に作られた照明。伝わる明かりが心地よい



### Topic6 瀬戸の名門



瀬戸の伝統系で注目すべきは瀬戸きっての名門を継ぐ、五代加藤作助や、31世加藤唐三郎があげられる。黄瀬戸や織部、尾張藩の御深井焼の伝統を守り、その中で伝統の持つ重厚さと現代的な感性を併せ持った作陶を続ける。そうした名門に支えられてきたのが日本屈指の高級食器。

本展では様々な作家による食器を取り合わせ、食事×瀬戸作家をテーマに素敵な空間を演出。つついー席設けたくなる・・そんな空間をどうぞ。

(図11) 加藤圭史、長江重和、岩淵寛ほか「瀬戸お膳取り合わせ」

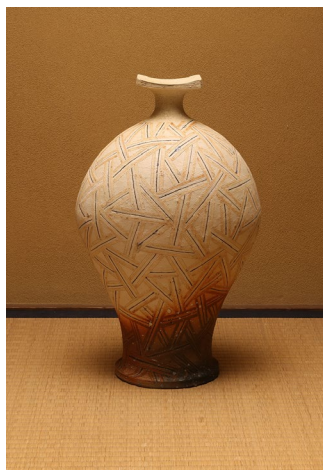
## Topic7 陶芸の創世を支えた歴代の会長の作品を展示

1907年に文部省美術展覧会（文展）が開催された頃、工芸分野はなかった。工芸分野として唯一の官制公募展は1913年に開催された農商務省図案及応用作品展覧会（農展）。そのジャンルは、金工、漆工、木竹、陶磁器、七宝などの調度品から家具、食器とあらゆるものが対象となった。もちろん、瀬戸からも愛知県立陶器学校の教師らによる出品がなされた。その後、各都道府県の展覧会へ積極的に出品して受賞を重ね、1946年の第1回日本美術展覧会（日展）において瀬戸の加藤華仙が特選を受賞する。まさにこの受賞は日展の瀬戸の幕開けであった。現在では日展の理念の理念にのっとり、日本の美術の水準と高めるべく、革新的に多彩な現代工芸の魅力ある世界を展開している。

**-ここがポイント!!-**

日展で活躍した瀬戸陶芸協会歴代の会長の大作を展示。亀井勝、加藤令吉、加藤唐三郎など・・・瀬戸の重鎮が並びます

**広報使用画像** メールにてお問合せください。mail : [n\\_hayashi@furukawa-museum.or.jp](mailto:n_hayashi@furukawa-museum.or.jp) (林 奈美恵)



## 展覧会情報

公益財団法人古川知足会 & 瀬戸陶芸協会共同主催

「古今無双―瀬戸陶芸物語―瀬戸陶芸協会100年への挑戦」

2023年9月8日（金）～10月1日（日） 午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

休館日：月曜日

会場：為三郎記念館（古川美術館分館）

主催：公益財団法人古川知足会 瀬戸陶芸協会

後援：愛知県、名古屋市、瀬戸市、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、  
瀬戸市教育委員会、瀬戸市文化協会、中日新聞社 CBCテレビ 東海テレビ放送  
スターキャット・ケーブルネットワーク㈱ グリーンシティケーブルテレビ㈱

観覧料：大人1,000円 高・大学生500円 中学生以下無料（為三郎記念館単館券：500円）

### 【お問い合わせ】

公益財団法人 古川知足会 古川美術館・分館 為三郎記念館

電話 052-763-1991 F A X 052-763-1994(学芸課)

〒464-0066 名古屋市千種区池下町2丁目50番地

担当学芸員 林奈美恵 ([n\\_hayashi@furukawa-museum.or.jp](mailto:n_hayashi@furukawa-museum.or.jp))